

Title	『河海抄』巻十論 : 後人増補混入の可能性を中心に
Author(s)	松本, 大
Citation	語文. 2014, 103, p. 14-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70941
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

河海抄』

後 人増補混入の可能性を中心に

はじめに

検討が未だ十分に行われていない。 史において極めて重要な注釈書の一つでありながら、 几 辻善成によって編まれた 『河海抄』 は、 『源氏物 諸本系統の 語 0) 注 釈

本は、 大津氏以降、 の奥書を基準として、 善成自身によって増補改訂された覆勘本系統とに分類出来る。こ 現存伝本のいくつかに残された奥書によると、『河海抄』 将軍家献上本であった中書本系統と、後に作者である四辻 内容による系統分類の検証はほとんど行われて来な 大津有一氏は早くに諸本を分類したものの、(1) 0) 諸

記 論考が挙げられる。 注記内容から諸本を検証した稀少な研究としては、 天理図 の引用記事が両系統を区分する指標と成り得ると指摘した上 書館蔵伝一条兼良筆本、(3) 島崎氏は、 巻十一の御幸巻に見える 龍門文庫蔵伝正徹筆本、 島崎健氏の 『李部王

かった。

松 本 大

本として提示された。 [書館蔵文明十三年奥書本の三本を、 中書本系統の核に成りうる

皆的に調査しなかった点に求められる。 行った調査によると、 誤判断を招いた要因は、 筆本と龍門文庫蔵伝正徹筆本の二本に関しては、 本文を有しており、 かし、この島崎氏の指摘には問題が 当初の姿を留めるとは言い難い。 調査可能であった天理図書館蔵伝一条兼良 奥書を尊重しすぎた上に、 残る。 これまで稿者が 明らかに後発の 注釈内容を悉 このような

本の 書写校合の際に発生した諸問題を扱うこととする。 系統分類を行った。本稿では、これに続くものとして、巻十を対 で島崎氏によって中書本系統の善本とされてきた、 象として諸本を系統分類するとともに、 伝一条兼良筆本と龍門文庫蔵伝正徹筆本の二本を中心に扱 これまで稿者は、 性格を明らかにする。 巻九を対象として、注記内容に即した新 注記の増補改訂や後人の 天理図書館蔵 特に、これま たなな

両

注記内容の検討

こととする。 本稿においては、紙面の都合上、これらの書誌的事項について詳 尾に、中書本の特徴とされる散位基重の奥書を持つものもある。 しく述べることは避け、あくまで注記内容からの系統分類を行う によっては、巻九と合綴されている場合もある。また、蛍巻の末 河海抄』 巻十は、玉鬘・初音・胡蝶・蛍の四巻を扱う。 伝本

を利用し、注記内容に検証を加えることとする。 条西実隆自筆本に代表される系統であり、A・B類よりも注記の 文注記が重点的に増補されていることが特徴である。C類は、三 書本に代表される系統であり、漢籍・仏典・記録などを用いた漢 蔵十一冊本や、角川書店版の底本である天理図書館蔵文禄五年奥 た系統で、比較的原態を留めると目される。B類は、尊経閣文庫 二十冊本に代表される系統である。この系統は、 B・C類の三系統に分類することが可能である。 分量が増す傾向にある。本稿においても、ひとまずはこの枠組み 先に示した拙稿によって、『河海抄』諸本は、大まかにはA A類は、 彰考館 近衛家を経由し

を示す。 (静嘉堂文庫蔵十冊本)

この三者の関係が最もよく分かる例として、以下に蛍巻の

例

仏のいとうるはしき心にてとき給ふみのりにも 仏は四意趣に住して説法し給也

はうへんといふ物ありてさとりなき物はこゝかしこたかふ也

うたかひをきつへくなむ

法花未得謂得未証謂証の心歟

B類(角川書店版

仏のいとうるはしき心にてとき給ふみのりにもはうへんとい ふ物ありてさとりなき物はこゝかしこたかふ也

仏は四意趣に住して説法し給也所謂別義意別時意長時意

平等意也

うたかひをきつへくなむ 法花未得謂得未証謂証の心歟

C 類 (天理図書館蔵伝一条兼良筆本)

仏のいとうるはしき心にてとき給ふみのりにも

平等意也 仏は四意趣に住して説法し給也所謂別義意別時意長時意

うたかひをきつへくなむ

はうへんといふ物ありてさとりなき物はこ、かしこたかふ也

法花未得謂得未証謂証の心歟

たないA類が当初の形と判断される。見出し本文の異同としては 来る。波線部の増補を踏まえると、注記内容としては波線部を持 見出し本文の異同(傍線部)と、注記の増補 (波線部) が確認出

形態が古いものかの判断はつかないが、C類の注記が波線部以外 A・C類とB類とに二分される。見出し本文のみでは、どちらの A類と同じであることから、C類はA類をもとに増補されたもの

該注記からは、A類が初期の形態を保ち、B・C類はそれに続く 影響関係は想定出来ず、 のの、見出し本文が異なることから、A・C類のような直線的な と考えることが出来る。B類は、 全く別の系統と捉えるべきであろう。 C類と同様の注記内容を持つも

を有している。最も顕著な一例を以下に挙げる。 門文庫蔵伝正徹筆本が含まれるが、これらは明らかに後発の本文 C類に分類される諸本には、 天理図書館蔵伝一条兼良筆本・龍 もの、

と認定される。

A 類 (静嘉堂文庫蔵十冊本)

にえひかうのかのまかへる よしある火をけにしゝうをくゆらかしてものことにしめたる

説薫物の火とりの事也云々案之普通火桶敷

裛衣香方

麝香半分 零陵香七分沈香二分丁子二两蘇香二兩簷唐二兩霍香三兩欝金 両

或衣被香浥衣香方千金翼方 右六種各別擣為散和合唯蘇合簷唐以手抜砕和且好

舌香 沈香 苜蓿香含五两 丁香 甘松香 雀悩香各一両射香半両白檀香三両零陵香十両 霍香 青木香 艾納· 方 鶏

B 類 (角川書店版

にえひかうのかのまかへる よしある火をけにし、うをくゆらかしてものことにしめたる

説薫物の火とりの事也云、案之普通火桶歟

裛衣香方

零陵香七分沈香二分丁子二兩蘇香二兩簷唐二兩霍香三兩欝金 両

麝香半分

沈香 苜蓿香各五両 丁香 浥衣香方 千金翼方 甘松香 霍香 青木香 艾納· 方 鶏

右六種各別擣為散和合唯蘇合簷唐以手抜砕和且好

一説衣比香麝香異名也見延喜式云々或衣被香 舌香 雀悩香各一両射香半両白檀香三両零陵香十両

C 類 (天理図書館蔵伝一条兼良筆本)

よしある火をけにし、うをくゆらかしてものことにしめたる

にえひかうのかのまかへる

裏衣香方 零陵香七分 沈香二分 丁子二兩 蘇香二両 一説薫物の火とりの事也云々 案之普通火桶

簷唐二両

翁長朝 臣流 薬ノ名 可尋 方 沈香 零陵香十両 比香、麝香異名也見延喜式云、衣被香浥衣香方 右六種各別擣為散和合唯蘇合簷唐以手抜砕和且好 霍香三両 欝金一両 麝香半分 苜蓿香各五両 丁香 甘松香 霍香 青木香 薬ニハ非ス 鶏舌香 雀悩香各一両射香半両白檀香三両 千金翼 艾納方

白檀 也云《最少分可加 ニテ合豆々此外ニ檳榔子ヲ少シ粉ニシテ入豆々冷キ匂ノ増 又古老ノ尼君ノ秘事トテ申ハ衣被香ハ麝香半分沈香 三分 何モ最上品ヲ取合テ少シナマセンシナル日葛 云々譬 ハ 薫十両ナラハ檳榔子一分斗ト

12類也 ~惣ノ 包 ラマトムル様 ノ有也 .譬ハ当時 三草ト云薫ノ

C 類 (龍門文庫蔵伝正徹筆本

同

えひかうのかのまかへる 説薫物の火取の事也云、案之普通火桶敷

衣香方

零陵香七分,沈香二分丁子二両蘇香二両簷唐 三両欝金一両麝香半 一両霍香

浥衣香方 右六種各別擣為散和合唯蘇合簷唐以手抜砕和且好

香三両零陵香十両 納方薬ノ名可尋 沈香 苜蓿香各五两 丁香 薬ニハ非ス 鶏舌香 雀悩香各一両射香半両白檀 霍香

甘松香

青木香為長朝臣流

艾

一説衣比香麝香異名也見延喜式云、衣被香、衣比香

については、次節で詳しく取り扱う。

私云エヒ香ハシヤカウノ異名也

ナラハ 冷キ匂ノマサル也式。最少分加へシト式。タトへハ薫十両 ル 也云々タトヘハ当時三草ト云薫ノ同類也 又古老ノ尼君ノ秘事トテ申ハ衣被香ハ麝香半分沈香三分 一白檀三分一イツレモ最上品ヲ取合テ少シナマセンシナ カツラニテ合豆 ヒンラウシー 々此外ニビンラウシヲ少粉ニシテ入云々 分斗ト云 々物ノ匂ヲマ 1 ムル様ノ有

これは、

初音巻の注記であり、

裏衣香の調合法を示したものであ

の調合法が提示されている。(8) 部 る。 部の増補記事であり、 iの増補が、 波線部の所在が若干異なる点と、C類のみに確認出来る傍線 諸本間の異同として指摘出来る。注目すべきは傍線 二種類の調合法に加えて、「古老ノ尼君」

ŋ 提示され、次いで「私云エヒ香ハシヤカウノ異名也」と私説が入 龍門文庫蔵伝正徹筆本においては、 その後「古老ノ尼君」説が続く、 といった形で存在している。 増補部分は、「裏書云」と

この傍線部は、他の注記とは異なり、漢字片仮名表記によって注

門文庫蔵伝正徹筆本は後発の本文ということになる。 補が加わった系統と認められ、天理図書館蔵伝一条兼良筆本や龍 たい。つまり、 記が施されている点から、 指すのか、 云」の部分が、私説のみを指すのか、「古老ノ尼君」説までをも 判断に迷うが、ここでは両者が後補である点を重く見 傍線部を特徴的に持つC類は、A・B類よりも増 後の増補である可能性が高い。「裏書 裏書の問題

しくは二行目のみを見出し本文と判定したことが想定されるので するのである。つまり、 にするものが見え、「えひかうのかのまかへる」は二行目に相当 しているが、これは書写の過程において欠落したものと考えられ る。というのも、 正徹筆本は「えひかうのかのまかへる」と見出し本文前半を省略 伝正徹筆本とでは、 また、同じくC類の天理図書館蔵伝一条兼良筆本と龍門文庫蔵 他の伝本の中には、この見出し本文を二行書き 見出し本文に異同が見られる。 見出し本文の一行目を書き落とした、 龍門文庫蔵伝

求められるが、これについても次節で述べる。ある。当該注記からも分かるように、C類内における下位分類が

以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見てきたように、三系統の注記を比較すると、ある程度の以上見ている。

B類(角川書店版) B類が当初の形態を残すと思われる箇所は、次の例である。

ゆめみたまひていとよくあはする物めしてあはせ給けるに

をんなこの人のこになることは

(一行空き)

虺維虵大人占之維熊維羆男子之祥維虺維虵女子之祥 吉克皇乃安斯寝乃寐乃興乃占我夢吉夢維何維熊維羆維

文は、 一つの注記として示されるのである。そもそも当該箇所の物語本 類においては、後半の見出し本文が前半の見出し本文に連接し、 題においては、後半の見出し本文のみとなっている。これがA・C 記が存在し、前半は見出し本文のみとなっている。これがA・C

とにかあらむ」など、このころぞ思しのたまふべかめる。「女子の人の子になることはをさをさなしかし。いかなるこに、「もし年ごろ御心に知られたまはぬ御子を、人のものに夢見たまひて、いとよく合はする者召して合はせたまひける

③二一九

そが本来の姿と認定出来る。 となっており、傍線部で示した見出し本文が連接することはありとなっており、傍線部で示した見出し本文が連続しているとの錯覚を招められてしまった結果、見出し本文が連続しているとの錯覚を招められてしまった結果、見出し本文が連続しているとの錯覚を招められてしまった結果、見出し本文が連接することはありとなっており、傍線部で示した見出し本文が連接することはありとなっており、傍線部で示した見出し本文が連接することはあり

がそれである。と思われる箇所が存在する。以下に示す蛍巻の例との形を留めると思われる箇所が存在する。以下に示す蛍巻の例またC類についても、僅かではあるものの、A・B類よりもも

C類(熊本大学附属図書館北岡文庫蔵本

さかしらにわかこといひて

(一行空き)

B類 (角川書店版)

さかしらに我といひて

さかしらに夏は人まね篠の葉のさやく霜夜を我ひとりぬ

る

A 類 (静嘉堂文庫蔵十冊本)·C類 (天理図書館蔵伝一 条兼良

筆本・龍門文庫蔵伝正徹筆本

さかしらに我子といひて

さかしらに夏は人まねさ、の

はの

初期の形態を持つと考えられる。 おいてもまま見られる現象である。多くは、A・B類で空行だっ もと空行であった箇所に注記を増補していく姿勢は、他の箇所に 類においては、 は人まね……」の和歌が加えられており、さらにA類と一部のC ままにおかれている。これに対して、B類では、「さかしらに夏 では、見出し本文のみが提示されるに留まり、注記部分は空行の C類の中でも熊本大学附属図書館北岡文庫蔵本に代表される諸本 引 歌の下の句が省略された形となっている。 もと

増補は、 性格を把握するためにも、 残存伝本においてはC類に分類されるものが最も多く、 見られないが、 である、漢籍・仏典・記録等の漢文注記において、この たと考えるべき差異が各所に存在する。特に、B類の特徴的増補 B・C類は増補が施された形態を持つ。B類とC類における注記まかな傾向としては、A類が比較的当初の姿を留める箇所が多く このように、各注記ごとで前後関係が異なる場合があるが、大 なお、A・B類については系統内部に大きな異同はほとんど 直線的な増補関係ではなく、それぞれ別の経緯で施され С 類の諸本においては更に下位分類が可能である。 更なる細分化の必要があろう。 各伝本の が傾向 が強

Ξ C類における下位分類

通して施されているのではあるが、ごく僅かな点で見逃せない差 の諸本を比較すると、 ここからは、 C類の諸本間の異同を中心に検討を加える。 注記内容は大凡一致し、 特徴的な増補も共 C 類

なる例である。 次に示す注記は、 注記内容ではなく、 注記の存在する位置 上が異

異が存在する

弁の少将

月廿七日任参議 永篠安人 左京大夫父不見左中弁近衛少将延曆廿 中弁少将猶如

年正

熊本大学附属図書館北岡文庫蔵本は、先の「さかしらにわかこと 二箇所に同じ注記が施される現象が発生したものと考えられる。 される諸本には、この両箇所に注記が存在しており、 である。 の注記の直前(踏歌に関わる長大な注記の直後)に確認されるの らかなり後方に位置する、「はんすんらく御くちすさひにの給て」 える。これがC類になると、「このとのうちいてたる」の注記か のうちいてたる」の注記の直前、もしくは見出し本文の下部に見 字で「在所可勘」と付される場合もある。この注記は、 これは、 11 「このとのうちいてたる」の注記の直後にあり、B類は ひて」の注記においては初期の様相を留めていたが、ここでは C類の中でも、 初音巻に存在する注記である。伝本によっては冒 熊本大学附属図書館北岡文庫蔵本に代表 校合の結果 「このと 頭に A 類 は

明らかに後発の本文と認められる。

に、蛍巻からもう一例を示す。「裏書云」や「私云」といった文言が付される箇所がある。以下「裏書云」や「私云」といった文言が付される箇所がある。以下

つかさのてつかひ

左近騎射真手番也

五月三日左近騎射荒手結五日真手結四日右近騎射荒手結

六日右近騎射真手番也

して提示する必要はなく、また傍線部が漢字片仮名表記であるこめる。もし、善成が私説を展開するならば、わざわざ「私曰」と傍線部は、衛府の騎射に関して、異説を私説として示したもので有云、 析ト云歟云、イ本手結ニ荒手結真手結トテ左右ニ各両度 私日五月四日ヲ荒手結五日真手結云、五日ノ荒手結ヲ日

当部分を示す。 この他に、胡蝶巻の例も該当する。龍門文庫蔵伝正徹筆本で該とも不審である。

の小児と問答せられし事なと歟

(職封人楚狂接輿か孔子をあさけりし事なとをいふか三人儀封人楚狂接輿か孔子をあさけりし事なとをいふか三人の山にはくしのたふれまねひつきけしきにうれへたる

裏書云

私云まめ人の色好を孔子のたはふれとは云也

と関わらせて論じており、稿者も首肯するところである。現存すこのように、池田氏は、『河海抄』の原態が巻子本であったこと

裏書テ

孔子東荊山の下に遊しに道に三人の小児ありて土を擁て いき此等を孔子のたふれとはいふにやひけくろの大将し りき此等を孔子のたふれとはいふにやひけくろの大将し に城をさるへし城何車をさらんと孔子車をとめて地にお に対をさるへし城何車をさらんと孔子車をとめて地にお に対をさるへし城何車をさらんと孔子車をとめて地にお

盗跖 柳下恵 賢仁也 盗人也 兄弟也

こと、この部分を善成の所作とは認めにくくなる。たことを物語っている。先の「裏書云」と関わらせると、なおのすべきは傍線部であり、注記が裏書の混入によって増大していっ当該注記は、諸本によって多様な異同を持つものであるが、注目

言及している。 『河海抄』に見える「裏書」に関しては、早くに池田亀鑑氏が

20

していたことは確実である。巻子装の伝本に施された裏書が、表 あった可能性を示唆しているように、巻子装の『河海抄』が存在(宮) 比野浩信氏が、伝一条兼良筆河海抄切について原態が巻子装で るところでは尊経閣文庫に巻子装の零本が残されており、また日 へと混入したと考えるのが自然であろう。

よるものではないことは、他の巻の注記からも窺える。一例とし この「裏書云」「私云」で示された部分が、確実に善成の手に 手習巻の注記を天理図書館蔵伝一条兼良筆本によって示す。 きせいたいとくになりて

基勢大徳肥前掾橘良利法名寬蓮子囲碁好事也

申ありけるに三字法名也寛蓮子もうたかふへからす 辻宮真人ニなり給て于時従二位中納言春屋国師に法名御 裏書云私云法名三三字をつく事公家さまには今もあり四

にて」の注記においても、散位基重によって施された増補部分は当該注記以外にも、小川剛生氏が指摘する蜻蛉巻「こけをおまし たがって、その裏書を施した人物も後人ということになる。また とあるように、もとは裏書として書き加えられたものであり、 伝本によっては存在しない。この記事は、傍線部「裏書云私云. ら明らかに後人の増補記事と判断される。「裏書云私云」以下は、 この箇所は、島崎健氏も別人の書き入れ指摘するように、内容か

は「裏書云」の文言が示された注記は、善成の手から離れた産物 この点を敷衍して考えると、注記冒頭に「裏書云私云」もしく

裏書云私云」から始まるのである。

ろう。天理図書館蔵伝一条兼良筆本や龍門文庫蔵伝正徹筆本は、(ミロ) しゝうをくゆらかして……」や胡蝶巻「こひの山には……」に存 性を補強するものである。先に見た初音巻「よしある火をけに が、C類のみに特徴的に存在するという事実も、後人補入の であることが見えてくる。加えて、これらの裏書注記による増補 有するのである。 かくのごとく、『河海抄』の原態からは掛け離れた形態・性格を 在していた裏書注記も、後人によって施されたと判断すべきであ 可能

る。現存伝本の中で、これらの諸本にしか存在しない独自注記も 異を見せるものは、龍門文庫蔵伝正徹筆本に代表される諸本であ にこの点に触れて終わりたい。C類諸本の中で、最も特徴的な差 両者の中でも、龍門文庫蔵伝正徹筆本は特異な点を持つ。 最後

確認出来る。次に示す例がそれである。 紫の上を廿七八といへともまことには今年廿七なるへし玉鬘

君を同年其故は源氏十八の時三歳なりき品定の年与夕顔

六九年まさる也玉かつらを廿はかりと云許詞は廿 に合給し年は同年也夕顔巻に君をおと、しの春いてき給 へりし女にていとらうたけにと云り此年紫上廿七源氏卅

とてむつかるめり」との間に存在する。龍門文庫蔵伝正微筆本と この注記は、玉鬘巻「こまかへる」の注記と「わかき人はくるし 紫上を廿七八と云さためさるも廿七なり 他の伝本には全く見えない注記である。(※)

同種の伝本を除き、

関わる注記がもう一 注記に符合するかのように、 箇所、 諸本間での異同を伴いながら存在して 巻十においては、 登場人物の年齢に

В 類 (角川書 店 版

W

る

音 秋好中宮廿九 六条院卅七 夕璅十七 紫上廿八 明石上廿八 玉鬘廿二 冷泉院十八 今上十

明石中宮十

C 類 (龍門文庫蔵伝正徹筆本)

·七玉鬘并一初音 明石上廿八明石中宮十十八今上十一秋好中宮廿九夕霧十七六条院卅七紫上廿八玉鬘廿二冷泉院

れる。 もともとは龍門文庫蔵伝正徹筆本のごとき形態であったと推察さ 年齢を玉鬘巻に施注することは、 音巻が時間的に連続していようとも、 玉鬘巻の末尾に唐突に く形として「六条院……」と施されるのに対し、 者を比較すると、 のが存在していない。 筆本・熊本大学附属図書館北岡文庫蔵本においては、 施されたものである。 は玉鬘巻の巻末にあり、 記である。 これは、 「紫の上を廿七八といへとも……」注記と一致する。 それ 初音巻の段階における、 が、 光源氏、 書写の過程であるべき箇所から外れたか、 龍門文庫蔵伝正徹筆本では巻名の「初音」に続 紫の上、 二種類の形態を持つ当該注記であるが、 A類諸本とC類の天理図書館蔵伝一条兼良 「初音……」と始まる。たとえ玉鬘巻と初 C類の注記は初音巻冒頭、 玉鬘の年齢比定は、 各登場人物の年齢を提示した注 通常では考えにくい。 初音巻における登場人物の 先に見た玉鬘巻 B類諸本では、 巻名の下部に 注記そのも В そのため 類の注記 もしく 両

> に類する伝本が、 態が発生したと考えられよう。両者の関係性については今後更な る検討を要するが、 校合に際して書き入れられたことによって、 В 当該注記においては、 |類に影響を与えたと認められ 龍門文庫蔵 В る 類 伝正 のような形

るが、 四十になりたまふ」 の年齢差を九歳とすることにも疑問が残り、 を三十六歳とする。 歳)とする根拠は、 ついて不審が残る。 当該二注記に示された各年齢に関しては、 や本居宣長『源氏物語年紀考』では、 単純に三十七歳が導かれるわけではない。 桐壺巻の十二歳から計測する方法も考えられ の記述から逆算することで、 現段階では不明である。 初音巻の光源氏を三十七歳 藤裏葉巻の 他の注釈書とは異な 特に光源氏の年 条兼良 (玉鬘巻で三十六 また、 初音巻での年齢 一明けむ年 『源氏年立 紫の上と

る年齢算出を行ったことが窺える。

ては、 定の人物によって施されたことを示唆している。龍門文庫蔵伝正く見られない独自注記である点は、これらの増補が後世のある特 る点は注目される。ただし、これが善成の手によるものとは、考の伝本の一種に現在まで確認されていない年齢比定が記されてい 徹筆本系統にのみ存在する独自内容については、 による補入と捉えたほうが穏当であろう。 定に関して兼良が何の言及もしてい えにくい。 各注釈書における年齢算出や、それを踏まえた比較検討につい 問題が大きくなるため別の機会に譲りたい 限られた伝本にしか存在していない点や、 ない点等を考慮すると、 また、 増補を行った人 他の伝本には全 が、 この年齢比 河

物やその過程も含め、今後更なる検証が求められる

以上のような比較を行うと、C類は下位三種に分別出来る。先の拙稿においては、天理図書館蔵伝一条兼良筆本・龍門文庫蔵伝の拙稿においては、天理図書館蔵伝一条兼良筆本・龍門文庫蔵伝が、実際はそれぞれ別種と認定出来る。更に、C類に見られるたが、実際はそれぞれ別種と認定出来る。更に、C類に見られるたが、実際はそれぞれ別種と認定出来る。更に、C類に見られるたが、実際はそれぞれ別種と認定出来る。更に、C類に見られるたが、実際はそれぞれ別種と認定出来る。更に、C類は下位三種に分別出来る。先近2000年のである。

四 巻十における諸本分類

と、以下のように分別出来る。 ここまでの検討を踏まえ、調査が可能であった4(冬)

A 類

第一種

館桃園文庫蔵十二冊本・静嘉堂文庫蔵十冊本館蔵本・今治市河野美術館蔵二十冊本・東海大学附属図書館蔵二十冊本・内閣文庫蔵他阿奥書本・島根県立図書

第二種

本・静嘉堂文庫蔵二十冊本・早稲田大学附属図書館蔵天正京都大学附属図書館蔵本・神宮文庫蔵無奥書一面十二行

館蔵本・天理図書館蔵文禄五年奥書本(角川版より)・東海本・東京大学附属図書館本居文庫蔵本・中央大学附属図書館不巻市図書館蔵本・佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵尊経閣文庫蔵十一冊本・国文学研究資料館初雁文庫蔵本・

大学附属図書館桃園文庫蔵十冊本・神宮文庫蔵寛永十八年

C 類

奥書本

第一種

学蔵下田義照旧蔵本・関西大学附属図書館岩崎文庫蔵本・表古屋市蓬左文庫蔵十冊本・名古屋市鶴舞中央図書館大本・名古屋市蓬左文庫蔵十冊本・名古屋市鶴舞中央図書館大田本・名古屋市鶴蔵伝一条兼良筆本・国立国会図書館蔵十冊本・天理図書館蔵伝一条兼良筆本・国立国会図書館蔵十冊本・

第二種

早稲田大学附属図書館九曜文庫蔵本

堂文庫旧蔵本本・学習院大学蔵二十冊本・國學院大學附属図書館蔵温故本・学習院大学蔵二十冊本・國學院大學附属図書館狩野文庫蔵

ポ三種

蔵二十冊一面十二行本・尊経閣文庫蔵二十冊一面十三行北大学附属図書館蔵旧制第二高等学校旧蔵本・尊経閣文庫冊本・秋田県立図書館蔵本・島原図書館松平文庫蔵本・東

熊本大学附属図書館北岡文庫蔵本・国立国会図書館蔵十六

一年奥書本

本・正宗文庫蔵木

D類(その他

九州大学附属図書館蔵本・北海学園大学北駕文庫蔵本天理図書館蔵真如蔵旧蔵本(角川版より)・三手文庫蔵本・

必ずしも直線的な関係ではない。

C類が増補を見せるといった大まかな前後関係は窺えるものの、係についても、巻九と同じく、A類が比較的初期の形態を留め、係についても、巻九の様相と大差はない。また、各系統の前後関極向としては、巻九の様相と大差はない。また、各系統の前後関

こに新たにA類第二種としてまとめた。であったが、巻十においてはA類に近似する傾向を持つため、こに分類していたものである。別途校合の可能性が想定される伝本に分類していたものである。別途校合の可能性が想定される伝本

第一種よりも増補が加わった箇所や異なる注記形態である箇所もた通りである。第三種は、第一種とほぼ同様の内容を持つものの文庫蔵伝正徹筆本に代表される系統であり、その特徴は先に述べ書館蔵伝一条兼良筆本に代表される系統である。第二種は、龍門書館でのいては、下位三種の分類を施した。第一種は、天理図

の、角川版に示された一部の校合だけでは判断が下せないため、天理図書館蔵真如蔵旧蔵本については、A類の可能性が高いものたものである。これらの伝本については、別途検討が必要である。D類に属する伝本については、右の分類には当てはまらなかっ

確認出来る。

ためD類に分類した。ただし、別途に抄出されたわけではなく、本は、注記内容としてはC類諸本の特徴を持つが、抄出本である本は、注記内容としてはC類諸本の特徴を持つが、抄出本である徴的な注記を持ちつつも、A類や他のC類と一致する箇所も見ら現段階ではその他に分類した。三手文庫蔵本は、C類第二種に特現段階ではその他に分類した。三手文庫蔵本は、C類第二種に特

系統分類においても、ある程度有効に働くものと考えられる。数の伝流を確認出来るという点では、他の巻や『河海抄』全体の以上の分類は、あくまで巻十に適用されるものではあるが、複

同一祖本によるものと思われる。

五 まとめ

以上、本稿では『河海抄』巻十を対象に、注記内容の検討を通以上、本稿では『河海抄』巻十を対象に、注記内容の検討を通いて諸本の系統分類を行った。書写が繰り返されたことによる誤して諸本の系統分類を行った。書写が繰り返されたことによる誤して諸本の系統分類を行った。書写が繰り返されたことによる誤して諸本の系統分類を行った。書写が繰り返されたことによる誤して諸本の系統分類を行った。書写が繰り返されたことによる誤して諸本の系統分類を行った。書写が繰り返されたことに不可能であり、改めるべき点である。

調査とともに、今後の課題としたい。のか、その実態を探るために残された課題は多いが、未見諸本ののか、その実態を探るために残された課題は多いが、未見諸本の断の迷う箇所も多々存在する。善成の増補がどこまで及んでいたたが、増補が善成の手によるものか、後人の手によるものか、判また、今回は明らかに後人の増補と認められる注記を主に扱っまた、今回は明らかに後人の増補と認められる注記を主に扱っ

- 十一卷、八木書店、一九八五)。 日本文学·日本語』第2巻、角川書店、一九七七·一一)、同日本文学·日本語』第2巻、角川書店、一九七七·一一)、同一、 島崎健「河海抄の異同―卷十一御幸の『李部王記』―」(『論集
- (4) 当該本は、阪本龍門文庫善本電子画像集(http://mahoroba.lib.(3) 当該本は、『河海抄傳兼点華本』(天理図書館善本叢書和書之部第
- (5) 拙稿「『河海抄』巻九論―諸本系統の検討と注記増補の特徴―」nara-wu.ac.jp/y05/y054/) として公開されている。
- 題する口頭発表を行っており、これについては別稿の用意がある。中世文学研究会口頭発表・於大阪大学、二〇一三・三・三〇)と「『河海抄』巻十一における諸本系統再考」(第36回大阪大学古代(『中古文学』第91号、二〇一三・五)。なお、巻十一に関しても、(『中古文学』第91号、二〇一三・五)。なお、巻十一に関しても、5) 揺稿 一河海抄』巻九論―諱本系統の検討と注記増補の特徴―」
- (7) 玉上琢彌編、山本利達・石田穣二編『紫明抄 河海抄』(角川書(6) 詳細は、前掲(1)の大津氏の論考を参考のこと。
- 田尼(藤原致貞女)を指すかと思われるが、なお後考を俟ちたい。(8) ここで示される「古老ノ尼君」とは、薫物諸抄に散見される山店、一九六八)。
- 態面から窺うことが可能な指標足り得ると考えられるが、詳細なられる箇所が存在する。この表記の差異は、注記の増補改訂を形在していなかったとは断定しえないものの、明らかに後補と認めたって施される場合がある。漢字片仮名表記のすべてが当初は存とが一般的である。これに対して、増補記事は漢字片仮名表記にとが一般的である。これに対して、増補記事は漢字片仮名表記にと、『河海抄』においては、漢字平仮名表記によって施注されるこ

は討は今後の課題としたい。

- (10) これは、龍門文庫蔵伝正徹筆本のみの特徴ではない。後述する、 これは、龍門文庫蔵伝正徹筆本はC類第二種に当たるが、この系統のが、龍門文庫蔵伝正徹筆本はC類第二種に当たるが、この系統の
- (11) 当該注記を、角川書店版(B類)によって示す。

本願天智天皇以去大化年中臨幸於外都遊猟於此砌之時仰本願天智天皇以去大化年中臨幸於外都遊猟於此砌之時仰本願天平神護二年軌摸東大寺之戒壇遷築当伽藍之幽砌天平神護二年軌摸東大寺之戒壇遷築当伽藍之幽砌在筑前国 沙弥满誓造筑前国観世音寺別当見万業 都府楼纔看瓦色観音寺只聴鐘声音家

該注記においては、内容から三者の前後関係を窺うことは難しい部の順になる。なお、後に示すC2類はA類と同じ順を取る。当線部→傍線部の順に提示され、C類では、波線部→傍線部→点線B類において右のごとく示された注記は、A類では、波線部→点

- (12) B類の中でも、この箇所には差異が見られる。尊経閣文庫蔵十冊本・天理図書館蔵文禄五年奥書本・東京大学附属図書館林園文庫蔵十冊本は、空行あり。佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵本・神宮文庫蔵本・石巻市図書館蔵本・東京大学附属図書館本居文庫蔵本・中央大学附属図書館蔵本は、見出し本文が連接して居文庫蔵本・中央大学附属図書館蔵本は、見出し本文が連接して居文庫蔵本・中央大学附属図書館蔵本は、見出し本文が連接して居文庫蔵本・中央大学附属図書館蔵本は、見出し本文が連接して居文庫蔵本・中央大学附属図書館蔵本は、見出し本文を連接する。
- 六)により、()内に所在を示した。 3)『源氏物語』本文は、新編日本古典文学全集(小学館、一九九

- 巻「かへりこゑに喜春楽たちそひて」の注記等でも確認出来る。初音巻「はかためのいはひして……」・初音巻「はちすのなかの(4) 今回は紙幅の都合上省略したが、玉鬘巻「こたいの歌よみ」、
- の人々が不審箇所に自説を加えていったことを窺わせる例である(15) 秋田県立図書館蔵本では、この箇所に更に注記が増補される。巻一かへりこゑに喜春楽たちそひて」の注記等でも確認出来る。

 $\widehat{16}$

A類の静嘉堂文庫蔵十冊本では、以下の通り。

こひの山にはくしのたふれまねひつへきけしきにうれへたる 孔子仆何事乎不審論語の長沮桀溺丈人石門荷簀儀封人楚 とこにや鬚黒大将シホウナル人ノ恋ノ道ニ迷ヲ孔子仆ニとこにや鬚黒大将シホウナル人ノ恋ノ道ニ迷ラ孔子仆ニとこいの山にはくしのたふれまねひつへきけしきにうれへたる

はもともとは非常に短い注記であった可能性が高い。波線部の漢字片仮名表記が気になるところではあるが、当該注記

- 文』第33号、二〇一〇·三)。 (18) 日比野浩信「源氏物語古注釈断簡管見」(『愛知淑徳大学国語国
- (19) 前掲(2)の「解題」。
- 前した上で、基重を小栗氏に比定した。との場で、基重を小栗氏に比定した。 小川氏は、当該注記内に、『河海抄』の書写に関わった基礎知識 №28蜻蛉』、国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、二○○基礎知識 №28蜻蛉』、国文学解釈と鑑賞別冊、至文堂、二○○基で知識 №28 「源氏物語の鑑賞と
- (21) 島崎健氏は、「圓満院旧蔵『河海抄』残巻」(『國語國文』第49

- 混入した、後発の本文と考えるべきであろう。 は業質巻に見える裏書注記を以て「ある種の古態を保存する伝 本」と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 本」と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 本」と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 経業質巻に見える裏書注記を以て「ある種の古態を保存する伝 とである。 と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、 と述べたが、ここまで行ってきた検討からは従えない。また、
- えるといった独自増補が確認出来る。箇所が見えず、その代わりに『文選』『西宮記』の引用が別途加箇所が見えず、その代わりに『文選』『西宮記』の引用が別途加B類や他のC類諸本が増補する「歌頭以下相引きて……」というこの他にも、初音巻「ことしはおとこたうかあり」の注記では、
- 無が分かれる。
 無が分かれる。
 はと見られない。当該注記の他には、例えば絵合巻巻末に光源氏の生齢を示す注記が見られる。しかし、ここでも諸本で注記の有の年齢と見られない。当該注記の他には、例えば絵合巻巻末に光源氏の
- (26) 永井義憲氏蔵本は該当巻が存在していないため、省略した(25) 前掲(5)。

(まつもと・おおき 本学大学院博士後期課程